

# 嵯原に残る道標・石灯籠・石仏

## 道標

かつて、愛宕山へは亀岡から嵯原を通って向かう参詣道がありました。

その道中、桃原池への分岐点付近に、側面に「右あたごみち」表には「右 山しなたい志やくてん 左たかそとわ 一の宮 こくふん寺 そのへ道」と刻まれた道標があるようです（見つけられなかったもので、以下は文献からの引用になります）。

「山しな」とは今の亀岡市旭町山階を意味し、「たい志やくてん」とは「帝釈天」すなわち南丹市八木町の「京都帝釈天」と福寿寺を意味するものです。

「たかそとわ」とは亀岡市千代川町の小松寺境内にある「高卒塔婆」を意味し、一の宮とは丹波国一の宮であった出雲大神宮です。「こくふん寺」とは亀岡市千歳町国分にあった丹波国分寺、「そのへ」は園部を意味します。

嵯原の集落の中心あたり（稻荷元町）には、石垣にもたれかかっているかのように道標が安置されています（画像1）。おそらく元は埋めてあったのでしょうか。「右 あたご 京さが 左 こしはた かみよし せきすじ道」と刻まれています。

また、ツーリストハウスの向かい、万燈山へ向かう農道に入る手前にも道標があります（画像2）。「みぎ こしはた かみよし せきすち道」裏には「安永四 乙未 二月」と刻まれています。安永四年（一七七五年）の二月に建立されたようです。

「せきすじ／せきすち」とは南丹市日吉町の世木を意味するものと考えられます。

これらの道標に刻まれている地名から丹波地方とのつながりがよくわかります。また、嵯原はかつて愛宕山参詣客のための宿場として栄えたといわれていることから、当時の賑わいをうかがい知ることができます。

画像 2



画像 1



# 石灯籠

灯籠は三基現存しています。一基は四所神社の前に「愛宕山」と彫られ、右側面に「嘉永五年 壬子八月」左側面に「村内安全」と彫られた石灯籠があります（画像3）。

昭和45年（1970年）ごろに道路改修にかかるとまでは、檜原の集落の中心の石標のあるあたりにあり、毎晩燈明が灯されていたといわれています。

二基目は高見町の般若寺に向かう道の入り口にあります（画像4）。正面に「愛宕山」と彫られています。裏や側面にも何か記されているようですが、すり減っており、判別が不可能でした。



画像3

三基目は、般若寺の墓地に墓石に交じって安置されています（画像5）。「明治四十一年八月十六日建立」「寄賜 東京 渡邊直達」と彫られています。

ただ、当初からこの地にあったとは考えにくく、どこからか移転したのではないかと考えられます。側面に三日月型の穴が空いていること、寄付者が東京の人間であることから、寄進された愛宕灯籠ではないかと考えられます。

また、稲荷元町の愛宕山入り口の鳥居の傍らに「常夜燈」と彫られた石が埋もれています（画像6）。かつてはここにも常夜燈があったようで、この石もその常夜燈の一部ではないかと考えられています。



画像4



画像5



画像6



# 石仏

稲荷元町の愛宕山登山道の入口に前掛けをした三体の石仏があります(画像7)。よくよく見ると、左端は石地藏なのですが、右端は小さな五輪塔、真ん中は何かしら字が刻まれているようですが、元は墓石だったかもしれません。

石地藏をよく見ると、「左あたご 右京さが」と彫られています。道標としての機能を有していたようです。近所の方に話を聞いてみると、石地藏は最初からその地にあったもので、残りの二体はのちにあちこちからかき集めてきたものだそうです。今はその近所の方が毎月一日と十五日に花を供え、前掛けもときどき交換しては、ひ孫さんのお名前を記しているのだそうです。



画像7

清水にも石地藏が三体安置されています(画像8)。近所の砥石業の方が代々世話をされていたようです。石を扱う職業のためだったそうです。子どもが多かった時代には、八月の地藏盆を行い、お菓子などをふるまったそうです。



画像8

万燈山の入り口から先に行くくと、墓地がありますが、墓地の手前に6体の石地藏が安置されています(画像9)。像の下部は四角い穴が開いているという形で蝋燭や線香を供えられるようになっています。

よく像を見てみると動物にまたがっているように見えます。愛宕神社の神と同一視された勝軍地藏(画像10)を模したものかもしれませんが、となると、将軍地藏の六地藏は非常に珍しいものです。



画像9



画像10

# 桃原池の地蔵・水神

桃原池は江戸時代中期の一八二七（文政一〇）年に、丹波国の国分村・江島里村（今の亀岡市千歳町）の費用負担で、嵯原の地に造成された用水池です。

桃原池の畔には、「桃原池」と標された石碑の横に石地蔵があります（画像11）。左手に如意宝珠（によいほうじゆ）を、右手に錫杖（しゃくじょう）を持っています。

土台には「無縁法界」と彫られています。宇宙のすべてが無差別平等であることを意味するようです。側面には「施主 国分村 江島里村」と彫られています。

この地蔵が、工事で亡くなった者を供養するためなのか、無縁仏を供養するためなのか、どのような目的で作られたのかはわかりませんが、国分村・江島里村の人々が何かしらの思いを込めて建立したものと考えられています。



池の淵を歩いていくと、小さな橋があり、その橋を渡ると「水神」と彫られた苔むした石がありました（画像12）。

地域の人に聞いてみると「水神さん」と言われているようで、池を作った国分村・江島里村の人々が、水神様に感謝の意を表すために、建立したのではないかとのことでした。



## 編集後記

今回は、嵯原の道標や石灯籠、石仏を調査しました。ご協力いただいた地域の方々には厚く御礼申し上げます。

江戸期のものが多く、その多くが愛宕信仰とも関連があるものであることから、嵯原と愛宕山の関係性の強さを知ることができました。

次回は、「越畑に残る石仏・経王塔」です。

参考文献：八木透監修・鶴飼均 編著『愛宕山と愛宕詣り』2004年

原をよくする会 編集『鎧田の里 嵯原』1993年